小品作

五三五 七、二四、

五三五、八、八

一般に一篇の心構で書きなくした數八篇。

加州羅府市南キングスリー街九八四番地にて

林田盛雄

林田盛雄関係資料

十吉　書斗　五三、八、

その店は、角口が二間、奥行が五間程で、店を間口から縦に半分割って、左側が[illegible]、右側が郵茶、雑物売になって居る。お客は、表の戸板が横倒に棒をりゝ方式の板に二人掛の腰掛を置いて居るので全部、鼻先の鉤型に二人掛った二人のみで、白人は一人も来なかった。

ブンは、その郵茶屋に接拶から仕事口をもらってやって居る。

ブンは、客と一言の挨拶をした後で、その五十が[illegible]の用事を五人から頼まれた。

用事の如く、夏弱な店で、お客も二人や人相手で、賣上げも、やゝやく、私の一日分食べる位のものでして、と考えは向側の隣大なるマーケットを相手に対抗如く指示して頂めたら、

私一人では、中食の時間も、お便所に行く用も、店を閉める所に出来ずにいて、主人、お手傳てして、一日一帯位で用を済ませる事出来ずにいたのは、[illegible]やすい位利だと、又心を満足した

林田盛雄創作用紙

が、傷けあ、地吹と、羊蹄を掘こと、兄一人のかヒキと、一人のまゝ計をさせこみ生活を捲こは、難こと負った。

で時間は、朝十八時から、夕方の七時迄、中食一時間で、一日十時間です。

ワシは、仕事通り、翌日から、働き始めた。

俺しゴンの家族で、電車で通勤、片道一時間を費さ来はならなかったので、結局、朝の七時に家を出て、夜、家に帰るのは、夜の八時になった。

発電所迄上にあるこの国営の住宅区域には、沢山の家族がいや、フラフラ、家が建て増し行った。俺もヤミ上の工夫人が、書籍工夫人住から経を発見し、新聞紙、新聞紙市の新工夫人住宅区域こと、工夫人が集合し来たので、庭は一日一日と賑やかなる。

工夫人は、工夫人以外の庭で余り食料品を買はなかったから、

この家は、カウンターこしらえて、紙屋の一部分である。

ワーコエ、ハイ、おーきな食べたら、豚も、鶏も、ニワトリも、全部食べならバーなる。

紙屋夫人が食べる時、カウンターと、牛肉と、鶏と、ターキーの肉に陽うまーみた。

住こ、紙屋の時、生活、善通のアメリカ人の時代では、国外こと

林田盛雄創作用紙

なこ、だから、工がや人の住む地には、いたるところに、このカウじゃ、病気になる者が多く、患者を隔離する隔離病院が生じた。

坂田氏は、ペンとと両人で毎日、工がや人に接客されたな。

工がや人の客は、トメトでも、ルでも、梨でも、林檎でも、一応の郵送、郵物を、一つ一つ掌に、自分で、完全な状態で、あるかどうかを、鑑賞し、自ら、秤量に、入れ、計量に、正確であるかどうかを、調べ、欠点を、発見すれば、あまらなくては、金を、押ほうと、命令した。低廉は、自ら、不良郵物は、買わ

前に、言はつかれて、味を、調べ、

坂田は、一日、二、三、十、郵便を、さばくの、学童に、毎日、

新鮮なもの、ばかりを、店頭に、陳列することは、出来なかった。毎日、すたりもの、ばかりが、出来た。それでも、新鮮なもの、ばかりを、客に、

つくしたな。

坂田は、失業は、自殺より、

つらいと、とく、坂田は、

要求を、拒絶、五十に、なれば、

ましものだった。

坂田の、性格を、

ゆがめ、

郵便の、

袋の、

弾力を、

持きとって、

みやく、

林田盛雄創作用紙

「あと、ご六、」坂田、口ぐせによく言った。

千六が、力使ったやうな面の顔をして、
力強い鼻の田舎の顔のくっついた
ユダヤ人の色白、丸顔、
四角顔で、長身で、ユダヤ人の勢力を見せ
ヨーロッパ大陸も、東自動車も、デパートも、
ユダヤ人の金権に支配されていた。
ユダヤ人が、坂田の邪魔
を中心に、悪巧みをするやつに、坂田は、
ユダヤ人者に、その力を、店に集まって来た。
黒人の軍隊手を使って、主婦達が、言役事を作ば
ユダヤ人を、神の如くもてなす、坂田の店に、何度の誘惑から
お前の手を用ったから、と言っては、買物に来た。

坂田は三新、この店を中心に、
マサリーダー大博覧会、平和と繁栄、
爆撃、防衛を計画した。大博
覧会、防衛、
防衛費は、ユダヤ人、資の本ホン、宣告塔をデカデカと見物
に、隠り、中した、中されも、しかし、以至、
の、ユダヤ人、
間のアーケードに、列、
坂田は、ユダヤ人、店員を五人、やとった。
店員達は、十三号、
ビルの、合、何も、坂田は、細、十六、男に、
増した。そして、時間
七時、

は、昔の僕の十時間働にしやった。

僕

たゞ、予想外に大繁盛すると、ベンは他の店員にいつかうことはなく、十時間十二時間をかけて、朝の七時から、夜の七時迄も働いた。その間に、朝と夕食を出へ、店を出て一時間位に帰えす昔の約束の苦痛は、なかった。

他の店員は、二十五から、三十、四五十位で、最年の者は、〃〃、化粧も一人前だったが、給料も、ベンの半分、十円位、四円給料をもらった。ベンは、自分の僕が、二十才の青年で、化粧も下手なのを自覚して、坂田に、ベンは、全く、軟弱、合理に、欠ける、を嘆いた。

坂田は、今では、立派な商人になった。私は、今、一つ大きな、ユガヤ人事の店員を、用事する手紙、ユガヤ人、資本家の、偉の、用に、進めるに、郵送、郵便を、坂田に、渡って、仕事を、坂田に、渡した。

坂田とベンは、ユガヤ等の、後輩をかたっぱしから、雇ってやって、おかった。

四年前の、昔の、坂田は、二年の、店で、親しみたって、店を、潜り、直って、来た、坂田と、ベンは、今では、かけ離れた、店の、主人、と、店員、になって、仕事、終り、給料の、労働に、対する、日、ベンは、親元、帰って、やっぱり、前に、店員の、坂田の、親、おに、敬、した。

事務員の、前の、坂田に、来、

「お、人、なも、欲、と、もらけて、来たので、僕の、働き、用、用、昔、のやうに

林田盛雄創作用紙

十時頃に遅もくつかたくらみ

「坂田」

坂田は黙って、ベッドの縁を見上げた。しばらくして、坂田は口を開いた。

「俺は立て支度を開くんだ。」

「だから、今の内に体身を世話をしやうと思こと」

「さうか、だが俺の支度は皆な日本式に十二時頃の

ものは十三時頃、十四時頃のものは十四時頃働てみるんだ。」

「そりや、知つてるけど」

「ベッドは直ぐ寝息くだ。

「まあ、すると坂田は急に開き直つて言ひ放つた。

「ユー、行主人なのか、俺が主人なのか」

「さうしの意味で話の話人ではない」

「ベッドは絶絶！」訓練した。

「オーライ、ライ、解つた、帰れ」

坂田は、ベッドにさう言ひ捨てて出た。

「ベッドは黙ると、坂田の言葉を解れて、黙って廊下を歩きまし

た。

ベッドが帰った後で、坂田は、夜業の

働く支度に洗面し乍ら、

疲、話せたリル話がれた。

アメリカ米の人は、全くで働き時間の本とはかり言にしてやる

「危勤は、その米は返事をせず、口をつぐんで アップルを無言で食べた。

林田盛雄創作用紙

九月

煙草

（五三五）八、七、

八月に入って、暑気が増き、夜の地蓋は、十一時、十二時になっても消えられなかった。都会の飲達は、夜の燈を消しても、客をかけ放して、自働車で、夜のライデンスを一つ一つ消して帰った。

トクトクと高坊やも、久金伍は、裏と二人のお紙、田舎の親に頼まれて、大ぜいに面会を連れて、ヨウカイデンスに放火や強盗に出掛けた。

今度の週末には、田舎に行こうか、と言いつつ、伍は、金伍の徒輩に、接吻で、自分の機の隣の隣の隣

一年に二回位、それも正月・夏休しか、分には
生れ故郷の国会の近所に帰る機会がなかった。彼もその二
人の間は、夏は、夏休授業を受けて帰省が出来なか
ったので、彼女は、トットちゃんの言葉の実現を楽しみ
にしまなかった。

トットちゃん言葉は、夫妻は、今日の親とは何の関係
もなかった。只、同じ郷里出身で、平和な彼
同郷の交しで、夫人は自分より十年、大きな彼女を、
初めて離しの生活は、他人面倒を起きるとも限らないから
という理由で、その二年間留学に通はせている
だけであった。

で、トットちゃん夫妻は、分に親戚には、一年二度の帰郷
かなかった。彼と、夫人は、つ田舎の雑貨屋で、娘を大学に
通はせる、今は田に生き甲斐を感じていた。

だから、
トットちゃん夫妻にも、郎さん夫妻に手紙を出
して、その日が待ち遠しかった。
それでも、トットちゃん夫妻は、分に連れ
は、以後を無事なる世間話に、彼女は、
アメリカに、不安二人を連れて、近の日の市ちゃんに
遊ぶ

親の元に
訪問する
に、
も
帰郷
泊まった。

林田盛雄創作用紙

ドクトル夫妻は、四年で二百円をトウイツして帰ろうとする前の晩、書斎を、今日の歓迎会を一日と限り食卓はを開きたいも、しきりに今日の人格を褒めて讃った。

「本当に、アメリカ婦人の姉ルーしは、アメリカ人の本分を尽くしてい、勉強ぬきで、立派に立派に立派に

マア――

トクトンは言った。

煙草がなかった。

トクトンは　オンチを　侍士　した　陽

隣りやうとした。

妾、持って来ました。

今　たった　後の事から　声を　張り　上げ　て　氣を　開けて　みたら

ラッキー　を　二つ　トクトンが言った。

今には　遅　不　た　、　後の　左に　死に　込んで　行った。

トクトンは、　今　たの　手から、　煙草を　二つ　受け　取る。

ポケットルを　井　皆　突き　込んで、　大　の　音が　する　やうに

二十五仙　紙　貨　を　一　枚　取り　出　た。

今には、　長　の　間　の　壁　ゴ　と　し　の　習　慣　で　、　トクトンは

掌　の　事　から　二十五仙　紙　貨　を　受　け　取　る　と　、　直　ぐ　に　左　に　走　り　出　た　。

さ　き　ま　う　と　言　っ　て　込　ん　だ　。

その　後　、　トクトンは　今　は　二　階　の　自　室　に　戻　っ　た　後

で　、　フ　リ　フ　リ　時　を　三　て　、　書　か　ら　し　た　。

大　年

アメリカの　姫　なんて　なっ　ぞ　み　た　ら　。　後　か　ら　煙　草　代　を　ジャ　ド

ー　と　二十五仙　と　る　な　ん　て　!!

ま　ー　し　、　トクトン　氏　は　今　た　か　ら　買　た　煙　草　を　や　け　ん　ま　た　。

林田盛雄創作用紙

山己、　　年の末娘、　五三五　八、六、

妻は、市役所へ

その電車が、非常に混んでいますたので、
妻は、お供を抱えていた便利袋に片手を支
へて、身体の動揺を防いでいました。妻の傍
には、幾人もの人達が、矢っ張りこうして立
したが、仲に一人の老婆が、夜つもつて立
その老婆は、どう見ても、六十才を越すたら
うと思はれます。白髪に無惨で、腐もた身
体を、定廣の木綿衣を着て、あちこちの等に
離れのした黄の足袋を履いて、貧ぼらしい
姿でした。
身見た感じからいも
生き物の生命を
可哀なる貧乏生活で老の生き甲斐の生命を
るとーか思へまもくつた。
雑の陸も、その老婆の衣を見めこみました。誰
一人席を譲ろうとする人はありません。
六七十も電車をこしてから、その木を支にしみた
車掌が、「皆様で呼び掛けました。

林田盛雄創作用紙

とうなたびも、老婆や、子供（車掌の方に帝を要求し
命令し、車掌の言葉を、実行する男の人は、若い人や
も乗ってみますと、（子供）より（子供）車の（乗客）と混雑で人にもまれ
裏も、段々と来ました。子供を下に降
ろしを、大牧の傷ない子供の頭を支へ抱えみた相
車掌が、走ってゐる最中に、車や、老婆達の言ひ
み、前に坐ってゐた（電車が）（乗客）の手はかりの男の前に
やって来て坐ってゐる男に
流石まで、帝を婦人の方に譲って下さいませ
か。と訴えたさうです。すると男が言下に
不と答って、車掌の顔をにらみつけた。
俺は、一人前の電車賃も持つ大人が、その私にまだ
電車は電車賃が急いか。俺は十人時間分の量
に働いて来て、疲れたんだ。そして、男は、国家
の人達を思ってやから、
言って、疲れるかって、怒って、
車掌は怒りつけたさうです。
車掌は、泥棒でないなら、帝の方を金を
とって帝を立てるな。
お客を
半分だけ
（乗客達）
（子供）
（乗客）
（電車が）
（乗客）
（車掌）
（車掌）
（車掌

て、車掌は黙って、車掌室の方に去ったさうです

その男の隣室の人達は、一時、息を殺したやく静まり、
その男を眺めたり、お互に顔を見合せたりしてゐたさうです

駆て、お婆が一人降り、二人降りして、電車が、住宅
区域を走る頃に、お客がまばらになって、妻も、子供
も、年寄も、皆、安堵の色を浮べ、さっきの男も、初
陣を負り傷ひ〜みた恰です

妻は、お腹を抱えて、何気なく、男の方を
の男を眺めると、未練がましく、しきりに
きまゝ、中間で、完結を固くみまもってます。全く夫婦
喧嘩

くいってます。
始めは、珍らしく、面白くもあり、喧嘩の対話は、
寄席見物みたいで、楽しくもあり、完結相有、天運の悲
劇で、妻の心も、人並に可愛相なったさうです。
なるこの強の男を憎まずには、みられなかったさう
です。でも、喧嘩の男は、周囲の住民に、何は一顧
も、挨拶なしで、盛人はきまゝを貫ける。そんな、強い、議論
とりも、思はる程の、秋の新さで、

林田盛雄創作用紙

外の等音は、すっかり雑談を中止して、竜平の動作を
観察しはじめた。
お婆も、裏の膝の上から、不思議に思つめていた
両掌で本を押さえて、時々、裏の顔を
眺め上げて、何か考えだすのだった。
すると、この間から、お婆は、
嘩の男めに、年賀状を、かいたことがあるか
嘩の方へ側で、嘩の手本を、まねさせたりする。
まーま、しーー と幼心は、
嘩の手本を、なめるんですよ。裏は、パッと、心を傾ける
て、お婆の、等の甲を、動き出すのだしめけに
無言。
実は、裏は、なくのさっき、お婆の嘩の手本に気がつかなかった
しかし、前から、お婆は、自身の膝の上に、選んだ手の指
で直接、彼をみたらしく、裏がの指を、同時に、向って、彼の
手を、直ぐ、皆な、念を、伸ばしたさうです。
すると、急に、嘩、両人が、手の動作をやめて、お婆に
彼を、買い、裏が、頼みをみたさうです。
裏は、頼を、書き、嘩、なし、無数、多く、なめたと、言
ます。
そして、嘩、講、お婆に、向って、大きく、手直、の動作
を、始めて、みた。
裏は、嘩の、両人の、やさしい、心、使、念、
嘩、
林田盛雄創作用紙

表は

林田、電車の窓で、顔をかがなこで、隣人で、相手。
心と時で、
図鑑の意を考えたさうです
まして、「和の年寄達も、遠に、動く、笑て、山羽先
、軍の乗人に向こ、夫、相手を贈ったさうです
さっきの留を起こした、勇傷者、寄の男も、つつの目に
相を貸ましめて、その顔を見て、
つた相です
子供は、子供の魂があ。大人には、大人の心が、
電車、あけた、ドーキをあける、必要はないま。
ありもあつうす、走こみる、電車に

林田盛雄創作用紙

寝言　五三　八・二

かすかに、ファイン・ハを上げた豊の音から薄明りが、冷え冷えとする深夜の微風と共にての二階の一室に流れこんでいた。

晝間の労働で疲れて、寝相を乱して、寝巻の胸を押はだけて、やはり疲れているらしい、ふと目を覚した堀野十吉は、室の一角の電灯嘉に、[illegible]ある男に首を傾けて聴いた。隣室の渋谷という男は、[illegible]の男は、[illegible]を稼いでいる男は、夢[illegible]に乱れた寝息を吐いていた。

十吉は、[illegible]思ひつもかく、久、沮[illegible]を天井に投げて、みた。すると、渋谷の乱れた寝息が、新婚の[illegible]に特化し、[illegible]、飛び、おうふ、おうふ、おうふと、笑り、[illegible]の声を、[illegible]、[illegible]、[illegible]

苦かった。

苦しかった。

「死んだ親父、俺を逆さに葬りつるして重に乗り

「母はたよ」

「死んでもならん」

泣いて、洪次は幼心の胸の奇々言葉を話した。

貧乏と大工の飯食べたく木の洪次は、墨紙に郵便

の書こうは、墨の前で幼かう洪次の姿をつかんで逆さ

にして軒下に吊した。洪次は、悲鳴を挙げ、或る時

は鼻血を流し、或る時は気絶した。

だから、洪次は、死んだ父に抱かれ、弱虫のも、その女房

だと思った。母の親子の原因も、父の拷問の苦しみたりけ

むみた。洪次は、三十才を過ぎた今日、

「俺は隠坊場の幼時の苦しい夢を忘れなやまされた。

たりすることきてんた

五十吉は、よく夢を叫ぶ。俺は十吉は夢で父母

腹口合の悪い人ら言こるものでなく、てんた哀詩にた右

されるもいなくうとはいつも抱こうみた父、夢で性急と

林田盛雄創作用紙

潜在意識の作用するものである、と。彼は本当に夢の研究をしてみたのだ。だから、フロイドの生涯の今日の生活に最大の影響を及ぼしたのであり、現在でもそうである。

十吉は、街路で偶然、美しい少女を觀る。すると彼の意識は、その少女を追って、昔、どこかで見た事がある！と考えるのである。

彼が、歩いてゆく街道に、一本の巻煙草を落としてみる。すると彼の意識は、どこかで、昔、何度、この街道でこうした行動の伸縮で落としてみる巻煙草を觀たかの如く、すぐ、

である。

――

フロイドが、こんな事を書いてある

[illegible]結婚したある女、浮気に[illegible]を拾げ出し、赤インキを塗りまくる、[illegible]髪が[illegible]

――それは、若い女が、生涯の初夜には、血を觀るものである。と聞いてみた報酬が、現実には血をみなかった学に潜在意識の[illegible]――夢遊者になって、その[illegible]心の打撃を強く受けるものである――と。

十吉は、夢を現実に移して觀たり、現実を夢幻に

和訳して

意味

意を引く

林田盛雄創作用紙

置いしみたりした。十吉の現在の心境では、夢も現実も、暗黒と絶望とが、多数の交叉的作用として、ふたつの点に、夢と現実とを有機的に結び付けてみた。

だから、弁三者から覗る十吉の心情は、矛盾者か、特殊精神病者、学所患者に過ぎない。何し、彼は、他人の夢を聞き、探索し、解剖し、(中略)に結びをした。

(中略)彼の心は、常に好奇すること多かった。

実験心理学的な、彼の言葉を借りれば、夢と意識の例を、二重に、輝らしなかった。

さういう高調状態で、彼は性生活に入った。

仲人に見合をさせられて、一昨日、式を挙げ三ヶ月程前に、東京に出かけたばかりの妻は、アメリカ帰りの、一流の名医、健康で明るかで、明るい、動きを経験して、金まわりのよい十吉の生活は、調子に乗ってみたが、さうした方面の彼には無関心であった。

それを生活に訓化して、彼の傷ましく、楽しいく、苦悩の日々を、十吉は、婦人の愛性のためには、絶対に、性を賠まない、心情へ、ひみた。

由こ、妻の大事な大形な、恋人と心と、十二夜

林田盛雄創作用紙

仮、の寄る所に

（表情豊かな右隅）

はこの愛らしい小鳥は力のない如く、深閑の中に、
乳房を彼の胸に押つけた。
十吉は、深夜にふと目を覚ました。静かな寝息
を洩らす傍の寝り姿を、つくづくと眺めた。
こんな風に、彼と力を共にする時の日を、嘗て昔、
十吉は失ってしまったことを思った。さういえば、十吉の胸に
ちらつかせた。彼の身の前に、その裏を、どこかで、見た
事ある。
この女が、嘗て、十吉の妻だった。いや、十吉の妻だった。
女、そして女の胸に、十吉の心に、
3。十吉は、何度か幻想にとらはれた。
女が、裏切りをしつて、目を覚ました。
あゝ、
女の顔ばかり眺めて
女が、嬉しさの為ばかりにうんだ。
いや、女の顔ばかり見つめて
あれは十吉は、想念を破られて、その一瞬、裏の言葉
が、胸にかゝった。
寄り女を、十年も、二十年も愛しのたやうな
気持に酔つて、みたいな
主人公に愛して下さいー
女は無中になって、彼の胸に抱きつった。

林田盛雄創作用紙

（疲れ辟かに）

而、病人は、暫時に薄暗に陥ち行った。

薄明が忘れ[illegible]

うとうとしていた。

女は、彼に抱きよって、優しく夢[illegible]うつらに寝ていた。

「おうつと、昔から、楽しみなのよ。」

十吉は、[illegible]とは、起きた。

女は、すやすやと眠っている。

十吉は、そのまま、夜明けを一時も、動かなかった。

三日目の夜も、十吉は、女の寝姿を眺めながら、奇妙な幻想に耽り、[illegible]

女は、数多の夢がさめて眠っているかと思ふと、

彼が再び暗闇の中に[illegible]

[illegible]

「楽しみのよ！昔から！」

そして、女は、又、静かな眠りに[illegible]

十吉は、[illegible]は、起きた。そして、[illegible]

翌日も、翌日も、同じ様な動作を繰り返す。

十吉は、[illegible]

十吉は、結婚後十日目、すっかり[illegible]

きって、[illegible]

十吉は、[illegible]結婚後十一日目の[illegible]

女に、[illegible]

林田盛雄創作用紙

「俺は、君を離別する」

「おう！」

女は阿呆として、十吉の顔を見つめた。が、慌てて表情をしゃうとして、赤い唇を噛みながら、彼の胸に かよはう腕を差し延べて来た。

十吉は、女の肩を抱くのけ、引込んだ。

「俺、物が分かり、俺をだます気か！」

「おう、おゝ！」

「この人は、」

女は、不審な顔から、直ぐさうになった。

「馬鹿！」

「馬鹿っ、俺を、その馬鹿とでも思ってゐるか、」

十吉は、女をそっと。

「俺は、お前の前の恋人を愛する気持ちが、何の悪きとも判らんだ！」

彼は、やっぱり憎まれた。

「お前の十日間の行動は、まりや何だ、憎まれ女が、お前の前の男とは、男が、貴方、お前の前の男とは、何だ？」

男十吉は、急に寒くなって上衣を持って来た。来おった。

「何？何故？判らぬ、何故？判らぬ、」

女には見当もつかぬ。夫の行動に目をまわしゐる。

「馬鹿を言ふな！」

「仲人のところへ行ってくれ！」

と叫んで走り出た。

林田盛雄創作用紙

小説　　彼の心境　　五三五　七三一

和子

暑さと、疲労の働きで疲れて、ソファーの上に横になった僕、新聞紙で顔を覆って、かうとうとと仮眠を貪ってゐる時、表玄関をノックする音と同時に伸太郎君が這入って来た。

「昔でも行つか」

雑談の後で、伸太郎君と和子は、床に碁盤を挟んで、下着一枚で、手合時間後、碁に無中だつた。

日も日も、立て続けに、伸太郎君が負けたので、和子は、妻の座になつた。

「時間は負け、恋愛には勝つ」

とうとうと十年来の女人、伸太郎君は隠なつた。

和子は、妻の座を持つて手紙用がるが、伸太郎より二つも年長で、三十ゆにかゐる伸太郎君は、昔の僕の妻で、僕身で、ガーデナで、健康で、小金を持つてゐる。だから、何か事業を始めやうかと未だも結婚をーやうか。と決心がつかなかつた。

林田盛雄創作用紙

「紙に書けやと、とちくを先きに始めとも同じだとりあ。
「いりのが見つかったからさし」
「うーさし」（メキシカンのやうに黒く日焼けした顔に微笑）
伸太郎君はうなった。
「いつ焼く、田舎に居るけれども、今度の日曜日に都に行かうか。俺が手紙を出めとく。」
「うーん、頼むよ。」女の郵ってよ。
伸太郎君は、伸太郎君は、心の奥に言う故った。何新も銭新も持ってあれた言葉に解かれたやうに明るい表情をさ、葬をなる始めた。

長い夜は明けて

誰れでも、この アメリカ移民地で、長い徒身生活を二年働に身心を消磨して、三十歳を突破した青年達人達がさうであるやうに。伸太郎君は白人の活動写真や、見物や、魚釣りや、ローラースケートや。人のうはさや、通りまかる事を人の横顔や、時たまの毛唐の女郎買ってだけでは、人間らしい苦労好きは嫌をなかった。「俺男として未当につまらないと思った。」だから、どうかすると、夜も書も女のことばかり考えて活動写真が始まった。「人なる文学な嬉しみも、女のこと、性欲のことを思ひ出すと、直ぐに憂く憂鬱になった。

林田盛雄創作用紙

女というのは、老若問わず、人妻でも、娘でも、皆、女の声さへもが、伸太郎氏には、繊細で、ものすごく難しかった。或る時は、恐きっと、私の傳傳の対象であった。

伸も、その二三年来、幸子のかうりゆを、蓄積した個人的資金が、四千弗程になったので、彼自身が、谷間に落ちる岩石のように、一時間の倍も、広くなってみた。

でも、私は、彼を誘って、その田舎の田園を、彼の家に、焼を飛きに出掛けた。

「あの娘はいつか、どうも、変な性の悪い感じだ。」

「ソだからあそこ」

「駄目のハイスター」と、幸子と、百姓の手傳をしてゐる娘を、勉との駄りに、首を振りに、の傳に、来てゐる伸太郎氏に、述懐した。

「ふーん」

伸太郎氏は、そうなったっただけであった。

伸太郎氏は、性についは、十年程、私は、来ってみたと言った。

「で、二三日して、友人の田舎で、他の女と、別の娘を、勉に、彼と、二人で、出掛けて、みた。」

林田盛雄創作用紙

とうも、あの娘は、俳句はなかなかうまかった。
娘を選んだ後で、私は、伸太郎君に近づいた。
ーもしもし伸太郎君はうなづいた。
彼に、私の話を訴える事に、女の話をし、彼と座上で
夢の変に、女の目鏡に鏡木に。伸太郎君と女と
私と、春から夏へ、秋へと、伸太郎君は、私の変やる
姿に、現実や、キャンデーや、花や、ビル和も勘考く
の時をしたことだろう。
私は、半年ばかりの間に、伸太郎君と連れ
前後八回、八人の娘を選び出した。

私は、娘を選び出すのに一つの特別なルールだった。伸太郎
は、
この娘は何処に住んでいるどんな娘ー と話すと
伸太郎君は、選び出す時のやり方を 特徴
伸太郎君は、選び出す時のやり方を 特徴
伸太郎君は、息を殺そーと、私の顔を注視する。
私は、あの暗の目の伸太郎君の真面目さに惚れる。
が、私は、既に娘を選び増した。つまんだ。あった。
伸太郎君は、大きなケーキを買ってきて、三十三才の誕生
日の宴を私の家でお祝ーした。
年上の ケーキの 三十三本のローソクの灯を三十二本吹き消ー。
(にかくやく)

林田盛雄創作用紙

一本だけ残ったのも、明日の朝には、私はつくづく伸太郎君の運命を祝福したくなった。そして彼の結婚を祝福したくなった。と言葉をつぶやいた。

「伸太郎君、」

「うーん」

「君は、今日から、八百屋の娘を一番愛してやれ、」

「うーん」

伸太郎君は、ニヤニヤと微笑んだ。

「それが、君」

伸太郎は笑って答えた。

「どのお嬢さんも好きなんじゃないかな。」

「何だって、おまえ、本当に書いて見て、」

私は伸太郎の顔にホークの柄を向けた。

「うーん、」

私は、ホークを卓上に投げ出した。

伸太郎は、ホークを卓上に投げ出した。

「つまり、」

伸太郎君の手に合った恋情を見つめた。

クスクスと微笑みあった。

林田盛雄創作用紙

蜂、　五三五　七、三〇　林田

陽が高く輝めに昇って、みる間に深い霧が畑のうえに漂ってゐた。人々もさうであった。首をみるばかりかしめ、ほく古る紙であった。

眼をさまるものは、ビイと、トメトの香業だけで、霧が晴れた後の用だかは、海の面に浮んだ船が、直正面に眺下ろされた。海の面に浮んだ船とつる船が、彼女の眼を刺戟したり慰めたりした。さうした春を、彼女は相性の裏が出てゐた。

ユウは、もう帰ってゐた。

落嘗な頃、彼女の夫は、さう言った。

夫に言は不て始めて、彼女は、畑の陳列に帰宅した。

帰宅すると、彼女は、働りに疲れしみる二つの手をもって行った。

畑のうえに、彼の陳列に言って

毛蟹

由之、この国国に草花も植まりまセうーエ

ある夢、小鬼を蜂の上であやしたら、日本語新用牛を擦れ、みる去に訴ちた。

林田盛雄創作用紙

うん、竹さま、街に出たら、苗を買って来て了

最初あえ、日本の桜、立ち見たいなものだ

家庭に植えて育てう私しのわたと鶏小屋には

何もなく人形もの

皆もこのみるには、みなあ

さうあし。

夫人は、顔を見合せて、嬉しそうに、

さうした相手の紙に日、紙は、二方の夫人

嬉しそうにのようと思った。

自分の庭とは、いえ本当に嬉しかった。

紙は老いも若かった。保し、春かまいも

菜種の花が咲くやなし、夏の海に憩

加治ーも海水浴は人有くするへ千は、

水練りのハメト姉妹にプサかってテ秋色に

摩くも。コスモスの花が、庭に咲いても

なかった。畑の収穫を算盤にする朝の夫の

[illegible]

[illegible]を弱く[illegible]

と、力足の手を引いて、手伝育した 菜花を

リルめる夕方なつかしかった。

林田盛雄創作用紙

花のなかを、彼女は、窓ーしめった。「女でなかった。」
自分の姿は、しーっかりやくそもあった。
自性に慣れ、夫に慣れ、負金に慣れた彼女
の心は、未だ慣れない、親しみの薄く、やさ
しい、明るい、何気ない、何気ない、何気ない、
かった。
「あゝ、この国園に草花でも植えましょう」
始めて、この海辺の白堊として、街の小
ーテナに事を止めて特徴して、また年の春、夫は
傷く彼女の頭の傷口を癒し、去れた。
「今年も、花の苗を買って来ましょう」
去年の春も、秋の春も、
「うん」と夫は父事をして、春の言葉を夏にかう
思ってみた。
今年も、花を植えやう。と去年の種をまいてみた
が、彼女が加代子と共に、
この目にか、ぬりに花さいてみた。
翌朝、街に出掛けた夫に、彼女は、鶏の卵を
(ケ)
買う、森の中の泡に、パイパイを十個たう。
「花を苗を買ってあー
と言って言った。
去年の春と言った。

林田盛雄創作用紙

夫は黙って写真屋の前に立って、宿の背面の山腹に咲いた サボテンの間に咲いた兎を眺めてゐた。

「今晩、兎を刺つかな」

夫は紙に鉛筆で角をやうに描つかうと。

「あ、来てゐてゐるよ」

彼女はもう一度夫を指さした。彼女の心の眼に今夫が言ひ伸ばしてゐる鼠に、芋茎がすくすくと伸びてゐる夏の日の夕方の想像が浮めつてゐた。

「貸きもしないで、併し、夫は猟者だから、俺く大通の方に歩いて行つた。

夫の背後を、疑惑たる彼女は、おづおづとしみた。と、ツツーン と、彼女の背後たきの傍をさーと一陣の烽が、彼女の鼻先を掠めた。驚いた鼻頭をあらつて見つめた。

「犬の糞アツ」

彼心にカさぶたをあけ、彼女は片手で力まかせに烽を横つのけたり。

「人を写真にしてゐる。」を言つた。

「花もあつたに」

花ほくに

林田盛雄創作用紙

十五

バナナの房　（五三七、二三）

殺外！！殺外！！と勢倉の炎暑を通れる人達の自動車が、道に沿く大路を間断なく走り過ぎ、さういふ大道の交叉路に停車を停めて、伊太利人アントニオは、バナナを十箱しゝ買った。

陽も傾いて、その日の書も終を告げる車の上のバナナも残り少なくなつ来、駅に（アントニオは）

にはまだあるのに、つもの自くゝ、ぼンやりと、自動車の走路を眺めながら佇つてゐた。と一台の自動車が、低の軒に急停車した。「お客」と感じた瞬間に、車中から出かけた者は正敏の警官であつた。アントニオは不審に思つた。

「ポリーポカス」

「ハイ」

「お前は、裏ぶかあるか。」

「確かに」

林田盛雄創作用紙

「ハカ」・アントニオは、顔色を変えた。

「さうか」大きく警官が肯いてゐた。

「大通盲人の盗れを奪セろ」

彼を睨みつめて、警官が厳然たる態度で命令した。

「オーハ」と彼は力弱で言って、両肩を落して

「なっと言った。

すると、両人の警官も両肩をすぼめて苦笑した。

「抑引する。」警察に連れて行く」

「併し」彼は、彼女、バナナを指さし荷車のあ

ナを寄ずすると、

「警察のガラーチに入れてやる」と言ってあった。

黙って、ずっと惹れてゐるアントニオを、警官は自

動車の後方の席に押し込んだ。途中で、一人

の警官が、道傍の警察電話でしばらく何事を

報告してから、一直線に、紙は、警察の抑留所

に送り込まれた。

抑留所の使で、紙は、タ方一つの財産で

ある自動車と、バナナの事ばかり考えつづけた。

三日間

トテモ、バナナ行商人さうな男フロの手を
紙は裁判所に引き立てました。
若い、学問のある相当な判事で、国論の刑事
事件についてきました。紙を捕へた警官も出張して来た。
「色々な商ドや宣誓が済むと、判事が紙に
訊ねた。
「お前は、市民権のある市民か」
「いゝウ」
「お前は移民か」
「エース」
「なぜ、ありかに新住居留してゐる」
「忘れました」と紙は答へた。
「捕捕状には、お前の年は五十八才で、四十年前に和太利から移民として渡来したと書いてあるが間違ひなつか」
「さうでいやう」
「アンタニ才は、忘れたり、思出したりする、自分の
変のない、自身の新や、変まず貧の若き日のあつたことが
其矣さ人た。「さうでいやう」と答へた。

林田盛雄創作用紙

「英語で書き出来るか」判事は優しく紙
面を。警官や書記達が、紙を回覧して
共感した。アトムスも、つい捨て笑を洩らした。
「名前は？」
「ずい分は アメリカの大統領の大統領だ」
「知りません」判事の評決はこうだ
アンドニオは自分が何にも知っていないことを
かしくなった。
「言ったかも」
「では」と判事は同情した面持ちで
「アントニオ。あ前は今、誰かアメリカの大統領だ
か言って見よ」
アントニオは、ニヤニヤ笑って、判事に右手を差し伸べた。
「ミスター、判事」アントニオは元気盛んな挙手をした。
「ミスター判事は、バナナの分に、幾本バナナがなってみるかお存じですか」
「この だしぬけの質問に、幾度判所のものがいうに笑って朝木た。判事は、幾ばくもなくおきれた」と言った。
「世界笑した」
「知識くめ」

林田盛雄創作用紙

を不ではしとアントニオが微笑しながらいを用ったハナナは、木でありませうか、草でありませうかそれとも、草陣に多う所の新でありませうか

裁判所の人はキッとして弾劾の裁判官の一人の裁判官に向って

面に出ての一瞬の答へを待つ裁判官の面に出の沈黙が集中されました。

裁判官は、しばらくして、草の前に立ちました。

裁判官は、アントニオに直ちに命じて言ました。

「この手紙を言葉に出します」と言った。

本書記官は、法律の名によりて、被告アントニオに

（「言葉をけっしてくすぐき」）

ハナナ大百姓人の資格を奪って本事件中、被告の被

りたる犯罪を大友様のお市に命じます

「言葉」言ってると、裁判官はてどく笑う前に

ちょっと言って行った。

林田盛雄創作用紙

小品、

童話の宿題　元三郎　七・二〇

彼は机の上に置きました。

「何かよろしくお願ひします。日本語学園の教師は始めてですから、どうぞよろしくお願ひします。」

「いや、私共こそ、よろしく」

彼に向ひ合ひた学園長と、理事長が、新しく出来た校舎を案内した。

彼は、日本人倉や、新聞社の先輩の推薦を得て、大学に通の傍ら、自動車で通ふ日本の日本語学園の教師の職にありつけたのである。

今立派な校舎を誇りまして、出来した日本人の記念碑の建つ庭が、ハッキリ目に入ります。

「明日開園」

暫く、雑談した後で、学園長が言ひた。

「明日開園からの授業始めに、今日は何か一つ、創話及び、童話なりを、忘言葉に同めして載けます夫いか」

「それ、それ、それ、最初一つお願ひします」

「それ、それ、それ、最初一つお願ひします」

「是初の親切ないとの事」と相談した。

林田盛雄創作用紙

ハー、まるっきり坊ちゃまだ。

彼は堅くなって、ちょこんと坐った。

すると、この婚礼は、彼の婚礼を、アレヤ、コレヤと、童話の書物の住手に始めた。

今、彼が、この学園につきの学園長の元樓愛嬢の方ち合せに来る時、彼の下宿先の家庭に、大勢の子供達が、家の廻りを廻っているのを見た。彼の頭の中では、それ等の子供達が、家庭教師一年の無報酬の故に、宣伝ビラ、彼が毎日カレーパン、無料で食べるのを奪って、老いらくれの手に、ラーメンのフイルムを渡してはーなるか、と考えた。

成、結、と彼は心で相談をおった。子供達は、他人のものを無断で奪って喰べてはいけない、という友へも実行しているかも知れない。いや、子供は、無邪気だから判らぬ。

かなしいものだった。彼は、この一年も塾を辞したい。子供達が、欲しくて、欲しくて、組織から、貰われる位のを我、慢して喰べないことに決心した。

「ては、校舎の元朱振りますかな。もう色達が集まってねーでーやーしー。学園長が、うなずいたので、星事長が、言ってのった。

林田盛雄創作用紙

七つ、八つ位から、十姉、六年位迄の男の子の四年生の百姓の子達が、七八十人並んだ教室で、学問を教へる可成なる学校でした。そして学問を、彼の受持つ八つ位の生徒達に、彼は、実に真心を込めて、日本の大学校出の先生で、教師になる為に、学校を卒業して、学問を教へる職業を一しきり終へて、彼を新墾に紹介した。

彼は、地の百姓の子として、面もなく、身なりも小さいが、すくすくと伸びてゐる、朝の光の如き、若々しい、彼は、感激の強い、真摯な、一途に、一つ、一つ、教授した。

面白く、面白く、生徒達は、子供達は、正直一途に、夢人だ。日を追はれた。

或る秋、とても大変、貧乏な人が、住んでゐました。その人の家には、唯一本のフイフキスが、ありました。その貧乏な人は、大切に、その木を、育てました。大変大きな木になりました。

或る日、その貧乏な人が、食べようとして、フイフキスを、喰べたらけれど、

林田盛雄創作用紙

我慢し、帰ってから喰べようと思って朝早くから町牛乳屋へ出掛けました。その留守の間に、近所のお母達が大勢でそのフイックスの木の実を食べに来ました。

彼は、放擲かれ、壊けたにも、一人のお母の能重が、笑いながら古事日左走馬灯に発ばなかった。大勢の赤心に耳を傾けてみる生徒の視線

十二、三、才の、オバキールを弄ったる生徒、さっきから、しきりに、ピーナ、や、ハ、オールを食べて、話もせずにくりに聴こみ居くなかった。彼が、ニラケ、オルをのみを面白く思しも、一向に効果がなかった。大きと七キ地をしも平気でかくり覗けしみる。

彼は留息を吐いた。

他の頭の中では童話の進行と共にも、あのピーナツをかくしみるのは悪いわだ、と思はれた。今に嫉妬を起して、かも知れぬと想像された。同時に、又、あのやうなる生徒、或は彼の部屋に、彼の宿の悪魔のフイックスを皆左モギとって喰べてみるかと知れないと吸同の集、想が勝視に喧ったりした。

あのようし心を彼は心に決めた。あのピーナツをかフイックスを喰べさせるまで、喰いさせたまるか、と奮慨した。

そこで彼は、左手にフイックスの実を、右手にピーナツオーイルを、みつを発見しさけびました。

「やあ、オイルもの又まる、皆左奉仕ッ喰べて、皆左食べ」

林田盛雄創作用紙

しまへ」と叫びました。と彼は、ピーナッボーイが、
つくりする程大声で叫び、慌てて逃げ出しました。
「すてきだなー」と日吉。「大に坐り、オイ山本、オイ山本ーと呼び始め
ました。併、唯一人、ぼくの唯一人、呼びなる声がみました。
その子供は、お宝庭の隅っこに坐って、お腹が痛つよ、お腹が
痛つよ、ーと言っておりました。その子は、平常大変悪い子で
ありまして、ピーナッや、仲よし一人を、つも呼び捨てにしみま
したので、ーどうしも呼ばることが出来ない程、おなかをた
めしみる人でした。
その本当を、彼は、望みかけなれば第の如く、本はしばしの如く、
第一悪をうけて部屋に入れた。併し、ピーナッ呼びの方列は、平
気の平方で、いなおしの紙を近所になげたりしてみた。
彼は他の悪を発見さーたなった。彼は先に童話を中留
ー。その方列をにくみました。
さういう話しの悪を、きいきかう、ピーナを呼びみる方列と
加担して加めみたいな国長が、実先、制度後輩の体
彼に声をかけた。
「先生、その童話は面白をなさう」
「彼は博学ーた。ぶの国長に疑を生った。すると理事長
が、ーナ十ガリ切った声で言って被った。

林田盛雄創作用紙

「ソンナ童話はありやへん」

「彼は熱心に傾聴した。」とも用いた。

「わは、明日の宿題に取りまっしゃり」

そして、「彼は明の国教師を捧げにおった。

童話の結末はどうなった、かってと、明日の宿題はいい。

僕は一生懸命かかっても、結末をつけまっしょ。何べんもさう

てーやうが、現実に事がつかると、理想なんぞものは、どう

事実歪くるものか事物の予想を裏切ーまっしょから僕

やうと思ってまっしょ。

林田盛雄創作用紙